

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04543

研究課題名(和文) ユネスコ活動が青年のキャリア形成に与える影響とその教育的意義に関する研究

研究課題名(英文) A study of the impact of UNESCO movement on the career development of youth and their educational significance

研究代表者

安達 仁美 (ADACHI, HITOMI)

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：30506712

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、国内においてESD活動に取り組んでいる青年を調査対象とし、ユネスコ活動とキャリア形成の関連要素を分析することを通して、ユネスコ活動が持つ教育的意義と可能性を明らかにすることであった。その結果、民間ユネスコ運動自体は、UNESCO憲章に示された理念を実現することを目的とした組織である一方で、そこに、参加している青年たちの参加促進要因として、自己成長や他者との繋がりの実現に活動の意義を見出していることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで研究が深められてこなかった青年によるユネスコ活動の教育的意義について質的な側面からアプローチする点である。ユネスコ活動への参加促進要因が明らかになり、課題とされている若者によるユネスコ活動の促進に向けての実証的な示唆を与えることができる。また、ユネスコ活動の意義を質的に緻密に描き出すには、詳細な聞き取りが必要であり、調査対象者とのラポールの形成が不可欠である。本研究は、研究代表者自身がユネスコ活動の当事者であり、調査対象者とのラポールとネットワークを生かし、経験的な資産を活用しながら研究を展開した点において革新性のある研究といえる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate young people engaged in ESD activities in Japan, and to clarify the educational significance and potential of UNESCO activities through the analysis of the factors related to UNESCO activities and career development. It As a result, while the UNESCO movement is an organization whose purpose is to realize the principles expressed in the UNESCO Constitution, it was found that the youth found the significance of the activities to be in personal growth and connection with others as a factor in promoting their participation.

研究分野：教育方法学

キーワード：ユネスコ活動 参加要因 教育的意義

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

民間ユネスコ運動は、1947年にユネスコ憲章の理念に賛同した民間を主体としてスタートした。その運動は日本政府を後押しし、1951年に日本をUNESCO加盟へと導くこととなる。日本の国際連合への加盟が、1956年であることを考えると、それよりも早いUNESCOへの加盟は、戦後の国際社会への復帰に向けた、最初の一步であったと捉えることもできるだろう。

2013年3月に日本ユネスコ国内委員会が「多様化の時代におけるユネスコ活動の活性化についての提言」を発表した。その中では主に、青年の参加によるユネスコ活動の一層の促進、ユネスコスクールと中心とした学校教育・社会教育等を通じた持続可能な開発のための教育(ESD)の一層の推進の大きく2つの柱が立てられている。現在、日本では約300の民間のユネスコ活動団体(ユネスコの理念・目標に沿って、地域で独自の活動を行っている非政府組織、ユネスコ協会、大学ユネスコクラブ等)が存在している。また、日本のユネスコスクールは、平成20年は78校であったが、ここ数年のうちに数が急増し、研究開始当初の平成26(2014)年4月には705校とユネスコ加盟国中で最多であった。しかし、量が増える一方でユネスコスクールとしての質の確保に対しては課題が多く残されている。そのひとつがユネスコスクール卒業後のユネスコ活動の継続である。平成24年(2012)現在、地域におけるユネスコ活動を推進してきた各地のユネスコ協会・クラブの会員に占める15歳以上35歳未満の「青年」の割合が2.8%と低くなっており、若者に対するユネスコ活動への参加の促進が課題となっている。このようなユネスコスクールの急増に伴い、近年、ユネスコスクールの実践分析や教材開発、ESDの評価に関する研究は数が増えてきている(島野2013、見上2011、中澤・田淵2014)。しかし、ユネスコスクールの卒業後や民間ユネスコ活動団体で活動する青年に焦点をあてた研究はほぼされてきていないのが現状である。

研究代表者は、民間ユネスコ協会に所属し青年会員として14歳の頃からユネスコ活動に従事してきた。研究代表者自身が長期間ユネスコ活動の当事者として、多くのユネスコ活動に取り組む青年たちと関わる中で、上記に示した課題については実感を伴いながら認識をしてきた。その中で、長期間取り組んできたユネスコ活動の中で形成された、ラポールとネットワークを生かし、活動に積極的・継続的に取り組む青年の参加促進要因とキャリア形成との関連要素を分析し、ユネスコ活動の教育的な意義について明らかにすることで、提言に示された2つの課題に寄与できると考え本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、国内においてESD活動に取り組んでいる青年を調査対象とし、ユネスコ活動とキャリア形成の関連要素を分析することを通して、ユネスコ活動が持つ教育的意義と可能性を明らかにすることである。そこで、本研究では具体的に次の3点を研究課題として設定した。

- (1) ユネスコ活動に取り組む青年のユネスコ活動への参加促進要因の分析。
- (2) ライフヒストリー的アプローチによるユネスコ活動とキャリア形成の関連要素の分析。
- (3) (1)と(2)の成果を統合させ、日本のユネスコ活動が持つ教育的意義と可能性について明らかにする。

3. 研究の方法

ユネスコ活動に取り組む青年のユネスコ活動への参加促進要因の分析については、ユネスコ活動の活性化のために、ユネスコ活動に関心を持つ青年が集まり地域や世代を超えて交流を深めることを目的に開催されている「ユネスコ青年全国大会2017」を調査対象とした。3日間のプログラムの企画・運営は、青年会員によって実行委員会が組織され行われている。参加者対象者は、ユネスコ協会及びユネスコクラブに所属している青年、大学ユネスコクラブに所属している青年、ユネスコスクールに登録されている学校に通う生徒、ユネスコ活動に関心のある青年である。そこで、プログラムの最終日に行われた「さよならの集い」で語られた参加者一人ひとりの語りを対象として、SCAT(Steps for Coding And Theorization)(大谷2008:2011)を用いて青年たちは民間ユネスコ運動にいかなる意義を見出しているのか明らかにした。

また、上記の調査結果において、時代の経過と共に具体的な社会問題がプログラムのテーマに設定されず語られなくなってきたことをうけて、ユネスコスクールの卒業生や、卒業後に民間ユネスコ団体やその他の活動団体でESD活動に従事している者を対象としたライフヒストリー調査の実施を検討した。最終年度には、ユネスコ活動の従事者で、かつ1950年代にユネスコスクール(当時はユネスコ協同学校)で教員経験のある人物への聞き取り調査をおこなった。

4. 研究成果

(1) 参加要因について

前述した通り、現在、国内には約300の民間ユネスコ活動団体が存在し、その内、地域のユネスコ協会に所属する会員数は17000人を超えている。また、民間のユネスコ組織は日本だけでなく世界各国に広がり、その数は、100カ国以上、約3600に及んでいる。青年に目を向けると、民間ユネスコ協会、クラブに所属する15歳以上35歳未満の青年会員の数は520名(2016年)おり、青年ネットワークの形成や活動促進に向けての意見集約を目的とした「全国的青年連絡組織」という組織も作られている。本研究で分析を試みた「ユネスコ青年全国大会2017」は、

全国的青年連絡組織が年に1回開催しているものであり、ユネスコ活動の活性化のために、ユネスコ活動に関心を持つ青年が集まり地域や世代を超えて交流を深めることを目的に開催されている。3日間のプログラムの企画・運営は、青年会員によって実行委員会が組織され行われており、参加者対象者は、ユネスコ協会及びユネスコクラブに所属している青年、大学ユネスコクラブに所属している青年、ユネスコスクールに登録されている学校に通う生徒、ユネスコ活動に関心のある青年である。3日間のプログラムは表1の通りである。ユネスコに関する知識やユネスコ活動の中で生じる悩みや課題について共有し、アイデアを出し合い、実際にアクションに移すことを通して、机上の空論で終わらせない実質的なアプローチの中で議論を深めることが目的とされた。本研究では、最終日「さよならの集い」で語られた参加者45名の一人ひとりの語りを分析対象とした。「さよならの集い」では、全員が輪になって座り、1人ずつ順番に、大会から得たことや、これからの活動について語った。

表1 . 3日間のスケジュール

1日目	16:30	オープニング(開催概要説明)
	17:00	夕食
	18:15	アイスブレイク
	19:00	インプット①(ユネスコに関する勉強会)
	22:00	お風呂・就寝
2日目	7:30	朝食
	8:30	インプット②(アクションのアイデア出し)
	13:00	アウトプット(アクションの実行)
	15:00	リフレクションⅠ(班のアクションを発表し振り返る)
	17:00	夕食
	18:15	インプット③(他のユネスコ青年事業について知る)
	19:45	リフレクションⅡ(全員でアクションを振り返る)
	21:00	お風呂
	22:00	交流会
3日目	7:30	朝食
	8:30	さよならの集い(一人ずつ感想を述べる、まとめ)
	12:00	解散

まず、語りに記述されている出来事に潜在する意味や意義を明らかにすべく、SCATを用いて4段階のコーディングを行った。なお、4段階目に抽出された「テーマ・構成概念」からストーリーラインを描き出す際に、個々の参加者の語り含有する意味や意義からユネスコ活動に従事する青年層の傾向を明らかにする目的で、まず、意味の類似性に着目しながらカテゴリに分け、カテゴリ名を概念として取り出した。それらの概念を用いてストーリーラインを描き出した。その結果、「テーマ・構成概念」として抽出されたテーマは93個あり、カテゴリ分けをした結果、表2に示した13個の概念が導き出された

表2 . 語りから抽出された概念

【意欲的な仲間】【多様な他者との出会い】【世代間交流】【キャリアモデルとなる憧れの存在】
 【仲間意識・連帯感】【多様な活動拠点と活動内容】【安心感がある承認される場】
 【自己省察】【活動意欲の向上】【継承意欲の向上】【多様な価値を包括するユネスコ理念】
 【生活に根付きライフワークとして取り組むベテラン層】【再会を喜び再会できることを期待】
 【学習の機会】

表3 . ストーリーライン

全国各地で民間ユネスコ運動に携わる青年たちは、【多様な価値を包括するユネスコ理念】を実現すべく【多様な活動拠点と活動内容】を持っている。そして、青年全国大会のような【学習の機会】において【世代間交流】し、全国で活動する【意欲的な仲間】や【多様な他者との出会い】が、【自己省察】や【活動意欲の向上】や【継承意欲の向上】へと繋がっている。

また、【生活に根付きライフワークとして取り組むベテラン層】も存在し、若い世代の【キャリアモデルとなる憧れの存在】にもなっている。ユネスコ活動を通して【仲間意識・連帯感】が高まり、【仲間との再会を喜び再会できることを期待】しており、【安心感がある承認される場】ともなっている。

13個の概念を用いて描き出したストーリーラインは表3の通りである。これらの結果から、ユネスコ活動に従事する青年たちの様相を考察した。まず、抽象的で包括的なユネスコ理念であるがゆえに、多様な活動を作り出しており、異なる活動をしながらも共感的に関わり合い仲間意識や連帯感を育てていることが分かる。また、意欲的な仲間や多様な他者と出会うことで

自己省察し、活動意欲や継承意欲が向上することが、自己成長の実感となってあらわれている。以上のことから、民間ユネスコ運動自体は、UNESCO 憲章に示された理念を実現することを目的とした組織である一方で、そこに、参加している青年たちの参加促進要因として、自己成長や他者との繋がりの実現に活動の意義を見出していることが明らかとなった。

(2) 今後の展望

本研究の目的は、ユネスコ活動とキャリア形成の関連要素を分析することを通して、ユネスコ活動が持つ教育的意義と可能性を明らかにすることであった。しかし、先述した調査を通して当初の研究計画の変更が生じることになった。その要因となったのは、全国大会のプログラムに着目した際、1950年代に行われた学生によるユネスコ活動では「日本における家族主義の問題(1952年第3回全国大会)」や「絶対平和主義思想と集団安全保障(1953年第4回全国大会)」といった当時の具体的な社会問題をテーマとして取り上げられている一方で、現在も日米安保等の平和と関連する問題が多数あるものの、それらがプログラムに位置付けられておらず、また、参加者から語られることはなかったことである。つまり、民間ユネスコ運動は、UNESCO 憲章に示された理念を実現することを目的として進められているが、約70年間の中でその活動内容も変化し、青年がユネスコ活動に従事する目的が変容していることが分かってきた。

そして、現在の全国大会の中では社会問題がテーマとして挙がらず語られることが無かったが、ユネスコスクールで行われているESDにおいては、活動内容の確認シートの中に「ユネスコスクールの使命や目的を理解した上で、ユネスコが特に重視している3つの分野(1.地球市民教育、平和と非暴力の文化、2.持続可能な開発と持続可能なライフスタイル、3.異文化学習、文化多様性及び文化遺産の理解・尊重)に沿った活動を実践しているか」という内容が必須項目として加わり、具体的な社会問題に根ざしたユネスコ理念に基づいた活動内容を行うことが求められている。ユネスコ活動の教育的意義を明らかにし、ユネスコスクールから民間ユネスコ活動へのスムーズな接続に向けた知見を得るためにも、まず、民間ユネスコ活動の歴史的な変遷過程を捉えその特徴を明示する必要があると考えた。

そこで、教育的意義を質的に描き出すために、継続的にユネスコ活動に従事している者のライフヒストリーに着目し、ユネスコ活動の継続要因について明らかにすること次の研究課題に設定した。本研究の最終年度は、プレ調査としてユネスコ活動に従事しており、かつ、1950年代にユネスコスクール(当時はユネスコ協同学校)で教員経験のある人物への聞き取り調査と実践記録からユネスコ活動における教育的意義について考察を試みた。データ処理に関わる時間的限界のため本研究課題の期間内に研究成果を公表するまで至らなかったが、分析結果を資料として次期研究課題へと引き継ぎまとめていく予定である。

<関連文献・Webサイト等>

- ・大谷尚(2008)「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 - 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き - 」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』Vol.54 No.2、pp.27-44。
- ・大谷尚(2011)「SCAT: Steps for Coding and Theorization -明示の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法 - 」『感性工学』Vol.10 No.3、pp.155-160。
- ・奥山尚子「地域ボランティア活動の決定要因 J G S S 2006 を用いた実証分析 」『日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集』vol9、pp.107-122、2009年。
- ・島野智之(2013)「米と稲作を題材にしたタイと日本のユネスコスクールの交流のための予備的調査から得られた農学的観点からの情報」『宮城教育大学環境教育研究紀要』15号、pp.65-68。
- ・中澤静男・田淵五十生「ESD で育てたい価値観と能力」奈良教育大学教育実践開発研究センター『教育実践開発研究センター研究紀要』23巻、pp.65-73、2014年。
- ・日本ユネスコ国内委員会「多様化の時代におけるユネスコ活動の活性化についての提言」<http://www.next.go.jp/unesco/002/004/1346101.htm> (令和2年6月1日)。
- ・見上一幸「ユネスコスクールを通じた国際教育の展開」金子書房『教育フォーラム』48、pp.15-26、2011年。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 安達仁美	4. 巻 61 (4)
2. 論文標題 ユネスコ憲章と民間ユネスコ運動	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊社会教育4月号	6. 最初と最後の頁 54 - 57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 安達仁美
2. 発表標題 民間ユネスコ運動における青年の学び ユネスコ青年全国大会参加者の語りの分析を中心に
3. 学会等名 日本社会教育学会第64回研究大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----